

アフリカの「知恵」と私たちが 今すべきこと — 篤農家に触れて —

2015年6月20日。まだ辺りは真っ暗な中、私は朝5時半にチルメンガさん（ジュリアン・サワードゴさんのあだ名。ブルキナファソ最大民族のモシの言葉で「伝統医」の意）の畑に着きました。まだ誰もいません。しばらくすると、懐中電灯の光がこちらに近づいてきます。次第に農具のこすれる音が近づくと、子どもたち4人がつるはしを持っているのがわかります。子どもたちはあいさつをすませると、何も言わずに昨日仕事をした次の場所につるはしを下ろします。またしばらくすると、チルメンガさんが大きな袋を持ってやって来ました。チルメンガさんは、調査をしている私の元にやって来て、別の用事で遅れたことをわびると、すぐに子どもたちと横並びで黙々と穴（ザイと呼ばれる植穴）を掘りはじめます。

さらに10分ほどすると、チルメンガさんの妻ジュリエヌさんが頭の上に、堆肥が山盛りになった大きなたらいを持って来ました。チルメンガさんたちが掘った穴の中に堆肥をまいていきます。何度かこれを続けると、堆肥と一緒に発酵する前のチャパロ（モロコシで造ったお酒）

を持って来ます。ほんのり甘いジュースのようです。少しの間手を休め、チルメンガさんたちはそれを回し飲んでのどの渴きを癒やします。そして、休む間もなくまたすぐに仕事に戻り、重いつるはしをひたすらに打ち付けます。

1時間半もすると、子どもたちには疲れの色が見えはじめます。チルメンガさんは、仕方なさそうな顔をして、「子どもたちが疲れたから5分休憩しよう」と言い手を休めますが、誰も座りもせずに、立ったまま息を整え、本当に5分経つと仕事を再開します。

私も、疲れていそうな子どもたちを助けようと、彼らに代わってつるはしを振ってみることにしました。ラグビーで鍛えた私は、西アフリカでもことさら硬いといわれるモシ台地に、彼らが驚くほどのスピードでザイを掘り抜くつもりでした。しかし、チルメンガさんの中学生の娘から「そのままいい、私がやるから」と言われるほどのへっぴり腰。何度もやってみるものの、ツルハシを強く下ろしても10cmも地中に入っていきませんでした。

チルメンガさんの畑と「水食」

これからお話する西アフリカの内陸国ブルキナファソの中北部では、約5カ月の雨季の雨に頼った農業が生活の中心です。以前は何年か

に1度、畑を休ませることができたので、その間に生える雑草や灌木に砂や有機物が引っ掛かり問題にはなりませんでした。

しかし、近年、人口が増えて必要な食糧が増えると、畑を休ませることが難しくなり、いたるところを畑にします。雑草や灌木のなくなった土地に降った雨はそのまま水の流れとなり、砂や有機物を流し、溝を作るようになります。12ページで田中樹さんが「風食」について話されていますが、ここで紹介する現象は「水食(水による土壌の侵食)」といえます。そして、水食が起ると、硬い土壌だけが残って畑として利用することはできなくなります。

チルメンガさんはここで農業を主ななりわいとしています。19歳の時に出会った旅をしていた伝統医の影響で、一旦は自らも伝統医になると決めましたが、年老いたお母さんや家族のために、農業を中心にすることにしました。チルメンガさんは1962年生まれ、8人兄弟の末っ子で、90歳を超えたお母さんと奥さん、6人の子どもと暮らしています。お父さんが亡くなり、村の裏にある丘の斜面の約2haの畑を受け継ぎました。しかし、その土地は小石が多い斜面のため、それほど多くの収穫を望めません。そのため、集落から離れたところに自分の家を建て、以前お父さんが耕していた街道沿いの畑を再度開き、さらに近くの小学校の裏の丘に新たに畑

を開墾することにしました。街道沿いの畑はよく整備されていましたが、小学校側の畑は、やはり小石だらけで作物を育てられるような環境ではありませんでした。

耕作できる畑をつくる、壊れた畑を治す

チルメンガさんは新たな畑で耕作できるよう、さまざまな工夫を凝らします。

まず、最初に述べたザイ(植穴)の掘削という手法を用います。これは、直径、深さともに約20cmの穴を掘り、その中に家畜の糞を乾燥させた肥料を2つかみほど入れ、そこにモシの人びとの主食であるトウジンビエの種をまくという方法です。これにより、地表を流れ去る雨水が土壌に浸み込み、家畜糞からの養分が供給されるため、作物の生育が改善されます。1株に1つのザイ。その労力は大変なもので、チルメンガさんは5,000カ所ものザイを用意するのですが、家族総出で1カ月以上かかります。

次に石を水に削られてできた溝に置く方法です。これはディゲット(石提)と呼ばれます。石を置くことにより、降雨中の地表の水の流れが弱まり、上流から運ばれてくる土砂や木の葉などの有機物をそこにとどめる働きが、土砂で埋まるまでの数年間機能します。そのため、この地域の人びとはとくにディゲットを置くことを強く

望んでいるようです。しかし、この技術は大量の石を選び込まなければならず、そのためにトラックを借りなければ追いつきません。チルメンガさんの畑にも、父の代に設置したものがありますが、それ以外のところには、畑に行くたびに石を拾い、水食の起こった場所に石を並べていきます。

チルメンガさんはさらにディゲットの縁に、アンドロポゴンやニヤンタと呼ばれる、屋根や草の扉などの資材になる草を植えます。これを植えることにより、水食を抑制するばかりでなく、これらの草を売るなどにより経済的な利益も見込まれます。

の役割がまったくないか、といえ、そんなこともありません。まず、チルメンガさんは、私が訪れるたびに、「あなたが来てくれるから、今年はここまでできた」と言って、その年の試みを語ります。外部者が寄り添うことが現地の人の喜びとなるなら、それは外部者の存在する意義になるでしょう。そして、私たち外部者はアフリカの人びとから学び、検証し、学んだことをほかの場所に伝えることができるでしょう。長い時間をかけて、チルメンガさんのような篤農家の試みを丁寧に観察し、同じ目線で語り合うこと。チルメンガさんと接する中で私が学んだ、私たちがすべきことはこんなことでした。

清水貴夫

私たちが今すべきこと

ここで紹介したチルメンガさんの工夫は、実は、私たちがブルキナファソ、ニジェールで推進しようとした技術に似ていました。その技術とは、西アフリカで私たちが収集した技術を融合したものです。しかし、実際は、チルメンガさんの方法はむしろ多様なバリエーションに富み、私たちが考えた方法以上でした。

私たちはとかく先進国と途上国という枠組みの中で、私たちが進んでいて、アフリカの人びとが後れていると考えがちですが、それは決して正しい考え方ではありません。かといって私たち



写真①水食により硬い土壌だけが残ってしまった畑



写真②早朝から黙々とサイ(植穴)を掘るチルメンガさんと子どもたち